

モラロジーにおける「神観」研究史

松村健一

前言

昨年度（平成十年）の研究部ゼミが九月七日―九日に開催された。共通テーマは神の原理である。小論は、神観を討論するにあたって、過去から蓄積されてきた先人の諸研究をも俎上に載せるといふ意図のもとに先行研究を整理したものである。

以下、本研究所における「神観」に関する先行研究を整理・概観してゆきたいわけであるが、その際、

- 一 広池博士の事蹟研究という視点から
- 二 『道徳科学の論文』を中心とした考察
- 三 自然法という視点から
- 四 聖人研究による試み

の一―四に分けて論じたい。一においては、広池博士の事蹟・経歴・体験等とその神論すなわち「神の原理」の形成に関する研究を取り扱う。広池千九郎の「神の原理」は『道徳科学の論文』に突如として顕れたのではなく、その神観の形成という視点にたてば、広池の事蹟・経歴・体験等と密接に結びついていると考えるのが自然なの

である。二においては、『道德科学の論文』を中心とした考察を紹介したいが、これらは「神の原理」という語によって表される、モラロジーの創唱者としての広池千九郎の神観であり、それはまた広池の生涯の神観の結実であるといえよう。さて、この広池の「五か条」の原理の一つとしての「神の原理」は、正義（自然法）及び慈悲（「神の心を体得せる聖人の精神から生まれ出でて、すべて聖人をして聖人たらしめしところの唯一の精神作用」）をその本質とするものであるが、三においては自然法から見た神観、四においては聖人研究によるその一貫する原理の探求について、紹介したい。

尚、ここでいう先行研究とは学術論文を中心とし、研究発表会等における報告の記録については発表者の意図・主張が明確に伝えられているものを中心としたい。

一 広池博士の事蹟研究という視点から

モラロジーの成立は創唱者広池千九郎の生涯と切り離して考えることは不可能である。その意味においてモラロジーの真の理解は広池千九郎の事蹟研究とあいまって初めて可能である、とさえいえる。広池の生い立ちからモラロジーの成立までのすべての広池千九郎をとりまく環境・時代的背景、そしてその中にある情熱に支えられながら発達した広池千九郎の精神・思想、がモラロジーを成立せしめたのである。井出元はこのような視点から客観的・歴史的に広池の事蹟・素養・学問・信仰、等がどのように絡み合っているのか、その思想を形成してきたのか、ということに明らかにしようと努め、しかも精力的に報告・発表し続けてきた第一人者である。そのような視点から神の原理について考察を加えたのが『神の原理』の形成——広池千九郎における信仰と道德——（『モラロジー研究』No.22、一九八七）である。この研究は、「青少年時代における両親からの感化や事に当たった際の誓

いなど・古事類苑や東洋法制史研究等学術成果・神道や天理教との出会い、等を通して確立した「神の原理」について、「科学としてモラロジーを樹立しようとした合理的精神と科学的合理主義を超えた神信仰とは、広池自身のなかにあつてどのように結び付くのであろうか」という問題意識のもとに考察したものである。以下にその論の要約を引用する。

本論において論じたことを要約すると以下のごとくである。まず広池千九郎の「神」観形成の背景には、「神」の字義についての考察があり、また日本固有の祭神と天理教との対比が考究されていた。この中から「宇宙根本唯一の神」といふべき本体の考えが成立し、「所謂絶対神の説明」（『論文』⑦八項一節）・「宇宙根本唯一の神」（八項四節）・「現神」（八項五節）などの項目の基礎が形成される。さらに神の働きとして「因果律」の問題も神道思想を背景とし、それらを踏まえて「最高道德は何をもって神（本体）の存在を認むるか」（八項二節）・「宇宙的正義と神の慈悲の性質」（五項六節）などの項目が形成される。また「運命」の問題も実際の体験を踏まえると同時に、日本固有の思想に触発され、「自己の運命の成立せる原因を自覚し併せてその運命の全責任を自己一人にて負う事を以て最高道德の実行的原理と為す」（七項三節）という考え方が提示される。

次に「神と人」の問題は、中国の天道思想を基礎とし、「借り物の教理」に触発されたものであり、「人類の行動は自己がこれを為すにあらざして自然の法則（即ち宗教的にいえば神の力）に支配せらるるものなりとの観念を以て最高道德の実行的原理と為す」（七項二節）という考え方や、「分霊としての人間」という思想が提示される。

次に「信仰と道德」の問題は、自己の体験にもとづくものであるが、神の恩恵に対する感謝を基本とし、

その精神を實踐していくことが強調されている。まず、「神の実質・働き」という問題についても日本固有の宗教思想が踏まえられている。そして往年の信仰生活を通して「神を信ずることは必ずしも宗教の専有にあらず」（八項十二節）とし、「神に対する要求的信仰は普通道徳に属し神の心を体得且つ実行する信仰は最高道徳に属す」（八項十一節）を提示するに至るのである。

また「神の恩恵」として「最高道徳においては一切の事物を神聖なるものとして尊敬し且つ自己の精神生活及び行動を神の恩恵の結果としてこれに感謝す」（八項十節）とし、「伝統に対する報恩の原理」（九項三節）が説かれる。重要なのは神と聖人のかかわりに注目したことであり、このことによって「現神」（八項五節）という考えが提示され、「伝統表」（九項二節下）が形成されるのである。そして、「伝統」を介して神の意志を踏み行なうという思想が展開される。

以上、『道徳科学の論文』第十四章第八項「最高道徳は絶対神の存在を認む」を中心として、その背景と形成の過程を考察したが、随所で指摘したように広池の神観や信仰についての考え方は儒教や神道、さらに天理教の教えの影響を伺うことができる。しかしモラロジーは、広池がこれら先行する諸思想と接触することによって覚醒され、自身の体験によって生み出された思想体系である。それが結果的に見て先行する考え方や符号することがあつたとしても、それは単なる焼き直しではなく、一人の人格を介して形成された独自のものと考えなくてはならない。

また、口頭発表の資料としては、以下の通りである。まず、国体・神道・天理教と広池の関係とを述べたものとして欠端実「広池千九郎における信仰の確立」（「研究ノート」No.150、一九八四）があり、広池博士の事蹟を通してみた「慈悲寛大自己反省」の心使い・広池博士が「慈悲寛大自己反省」を誓った神、等について述べたものとして立木教夫「広池博士の『慈悲寛大自己反省』体験」——天理教入信から大正四年の困厄に至る時期における「心使い」と「神」を中心として——（「研究ノート」No.150、一九八四）、そして、「広池博士の神観をめぐって、観念的レベルだけでなく、現実の博士自身と、博士をとりまく諸状況の中で、博士はどのような生き方をされたのかを検討しつつ、その都度変化してくるであろう信仰観、宗教観とその実践の跡を辿っていかうとした」もので、神観の変遷を一期々五期に分けて整理している労作に玉井哲「広池千九郎博士の神観の変遷」（「研究ノート」No.150、一九八四）が存する。また、大正四年の困厄に広池千九郎の「更生・新生・すなわち決定的な転換」をみようとする一般的な見解を検証せんとしたものに山本健寿「大正四年のある日」——試練と運命——（「研究ノート」No.150、一九八四）があるが、その結論としては、「松浦が共苦しているらしい病の少女は、広池のいう全人類には入っていない」ことを論拠に「大正四年の出来事に、広池の決定的転換をみようとするのは、疑問である」としている。

二 『道徳科学の論文』を中心とした考察

さて、このようにして広池千九郎の生涯を通して発展・変遷するその神観であるが、それは『道徳科学の論文』の成立によってモラロジーの神観として結実する。そのようなモラロジーとしての神観を分析したものを次に見よう。まず、資料集『モラロジーと宗教』（『道徳科学研究』No.43、一九七二）は、「モラロジーは学問ですが、モラロジーにもとづく開発活動や、最高道徳の中に説かれている神の原理を見まして、モラロジーは宗教ではないか、という疑問を持たれることがあります。」というような疑問に答えるために編まれた資料集で、「内容を二部に分類し、第一部は『モラロジーと宗教の相違』、第二部が『神と信仰について』と題し、各々の中に、一

般の資料（第一部資料1、第二部資料1、2）と、モラロジー関係の資料（第一部資料2、第二部資料3）が、一応の体系の下に収録してあります」という構成をもつものである。そしてそのなかでもモラロジー関係の資料に関しては、『道徳科学の論文』の記載を中心としてまとめられている。また、水野治太郎と松本直義、両氏の解説資料を収録しているが特に松本直義「付、解説 モラロジーの神——神の認め方を中心にして——」においては、『道徳科学の論文』を主要資料として考察し、モラロジーの神の特徴を「1. 神の認め方へ聖人を通して、人格的に、神を認める」2. 神の存在の証明（聖人の事蹟によって間接的に認知する）3. 神の性質へ神の心を慈悲とする」4. 神に対する態度（信念にもとづく道徳的生活である）へ神（法則）を信じ、神の心（慈悲）を体得する」5. 神と人間の関係（神は人間の生命・幸福の鍵を握っている）へ人間の心が慈悲心になったとき三方よしとなり、人類の幸福実現ができる」などとまとめている。次に、望月幸義「モラロジーの神について」（『モラロジー研究』No.34、一九九一）においては、『道徳科学の論文』の成立によって結実するモラロジーの神観についてかなり整合的に分析している。『道徳科学の論文』を資料として扱ったモラロジーの神観の研究としては見逃すことのできない研究論文である。

また、モラロジーの神の性格が人格神であるかという問題について攻究したものに土屋武夫「神の原理について」（『研究ノート』No.99、一九七六）・山本健寿「モラロジーにおける神把握をめぐる」——神と宇宙・自然——（『研究ノート』No.147、一九八四）がある。まず前者ではモラロジーの神の原理について考察し、その神を汎神論ととるか人格神論ととるか、ということについて考えているが、結論としては汎神論とも人格神論ともとれる、ということとなっている。後者は「モラロジーの神は端的に人格神的なのか、それとも宇宙・自然神を人格的なものとみなすにすぎないのか」という問題意識からの研究。十全な結論とは言い難いが、「モラロジーの神は端的

に人格神であるとはいえない」との見解を提出している。また、別の視点からモラロジーの神について論じたものに美和信夫「モラロジーにおける神観念」——本体と現神の論理——（『研究ノート』No.93、一九七六）がある。これはモラロジーにおける神観念の本体と現神との関係について明らかにせんとしたもので、本体と現神の意義について

1 本体

(1) 絶対性・唯一性・普遍性・永遠性

(2) 宇宙自然の法則

2 現神

(1) 具体性・個別性・民族性・相対性・現実性・時間性

(2) 本体の媒介者

(3) 宇宙自然の法則の具現者

などとまとめている。ただし、口頭発表の資料のため、内容の詳細は不明である。他に、広池のモラロジーと宗教との相違についての考え方について考察したものに竹内啓二「広池千九郎の宗教観」——『道徳科学の論文』を中心に——（『研究ノート』No.178、一九九五）、神の原理の今日的な意味を最高道徳の究極的な基礎・世界に普遍的な価値として捉えているものに永安幸正「神の原理の構成と今日的意味」——へなせ神を問題にするのか——広池博士の説をめぐって——（『研究ノート』No.167、一九九〇）がある。

三 自然法という視点から

さて、「古来世界の諸聖人及び大識者は一般に神（本体）の本質をもって正義及び慈悲となしておるのであります」（『道徳科学の論文』第七冊P50）。「正義はいわゆる自然法」（『道徳科学の論文』第七冊P51）、等にもみられるように、広池千九郎はモラロジーにおける「神の原理」の一つとして自然法を見ている。そしてそのような視点から先人の諸研究を概観すると、やはり自然法とモラロジーとの関わりを論じたものがいくつかある。それは大雑把に言えば

- ① 広池千九郎の事蹟研究の視点から、広池千九郎の東洋思想研究とモラロジーとの関連を示すもの
- ② 広池千九郎の「自然の法則」の意味を追究したもの
- ③ 現代自然法論とモラロジーとを比較し、自然法としてのモラロジーの可能性を示すもの
- ④ 自然法研究としての広池千九郎の学問を顕彰し、補おうとするもの

等に分類される。まず、①の視点からの研究としては、井出元の諸研究が挙げられる。井出氏の広池千九郎の事蹟研究からのアプローチによるモラロジーの成立過程に関する研究については前述した通りであるが、その中で井出氏はしばしば『東洋法制史研究』というかたちで結実する広池博士の中国思想研究・日本国体研究とモラロジーとが密接な関係を持っているということについて論じている。そして『東洋法制史序論』がその内容から見れば中・日の比較自然法研究であることからみても分かるように、それらは東洋の自然法とモラロジーとの関係を論じたものという側面も有している。例えば、『広池千九郎における東洋思想史研究』（『モラロジー研究』No.10、一九八一）・『儒教と広池千九郎の道徳思想』（『モラロジー研究』No.18、一九八五）、等においては東洋思想、特に中国古代自然法と広池千九郎の関係について述べている。まず、前者によれば、東洋の自然観は西洋のようには人間と自然とが対立するものではなく、調和を求めるものであり、そのような東洋思想による自然と人間

との調和、ということを考えてゆくとときには、まず東洋思想とは何か、ということが前提となる。そこでその「東洋思想の再検討」という視点から、特に広池千九郎について見直そうとしている。そしてその研究業績としての『東洋法制史序論』の特色・意義、東洋（中国・日本）の祭祀に関する研究について概観し、そして特に広池千九郎が受容した東洋の思想として、(1)自然観——中国古代の「天」論——(2)倫理観——儒家の「礼」論——(3)伝統論——日本・中国の「祭祀」論および「孝」論——のそれぞれについて、詳細に検討している。そして広池千九郎の態度として、東西文明の比較という広い角度からのものであるばかりではなく、民族性との関連を重視していることに注目している。そしてまた巻末には広池千九郎の東洋研究に関する主な論著を「文献表」として整理している。また後者においては、孔子と広池千九郎の道徳実行の共通性を述べている点が注目される。また、「日本の伝統的文化と広池千九郎の道徳思想」——「広池千九郎」に関する補説——（『モラロジー研究』No.31、一九九〇）においては、広池千九郎の日本の国体研究と道徳思想・モラロジーとの関係が述べられている。

その次に、②の視点からの研究として立木教夫「広池千九郎がとらえた『自然の法則』——「自然」と「道徳」はいかにかわっているか——」（『比較文明研究』第一号、一九九六）が注目される。立木氏はまず井出氏同様に事蹟研究の立場から広池千九郎の生涯を一貫しているのは「自然の法則」の探求という姿勢であり、歴史研究や東洋法制史研究にそれはあらわれており、それが『道徳科学の論文』に影響を与えたことを指摘する。そして最高道徳と「自然の法則」との関係について論じた後、「である」(is)から「べき」(ought)を導き出すのは誤りであるという西洋の倫理学でいうところの自然主義的誤謬を広池千九郎は犯してしまったのであろうかという問題について討究し、広池千九郎が受け継いだのは西洋のそれとは違った東洋の伝統的自然であり、そこでは西洋のようには自然と人間とは分離した存在として捉えられていなかったとし、広池は、科学的研究を次のような意味に

とらえなおしていると指摘した。

「そもそも神は宇宙万有の創造進化の根本勢力及び根本原理であるが故に、神の真理が植物に現れたることを科学的に考証説明するものあらば、これを植物学といい、またその神の力が動物に現れたることを科学的に考証説明するものあらば、これを動物学というのです」

近代西洋において、機械論的に自然を前提として成立してきた自然科学探求の成果を、「大宇宙と小宇宙」としてとらえた宇宙(すなわち、自然)のなかに投影し、それを「自然の法則」の現れとして理解しようとするのである。ここまで自然の読み替えをおこなったうえであれば、*gōgen*を混同したとする自然主義的誤謬の問題は、一応、回避されるのではないだろうか。

と結論づけている。

③の立場の研究としては、阿南成一「モラロジーと現代自然法論」(『モラロジー研究』No.6、一九七七)がある。阿南氏は自然法についての多くの論文を発表してきたが、ここでは阿南氏は現代自然法論の課題を本性論・人間論・社会論の三つに分けて検討し、モラロジーとの比較をおこなっている。

④の立場からの研究であるが、広池博士の学問的業績については井出元・内田智雄を中心とする諸氏によって研究・検証されてきた。『道徳科学の論文』は広池千九郎の学問的業績特に国体研究と東洋法制史研究に支えられているが、それは『東洋法制史研究』として結実する。そしてその序論としての『東洋法制史序論』は中国と日本の道徳的準則としての自然法を比較し、国体の比較をおこなったものであるが、松村健一「『東洋法制史序論』の位置付けとその『道徳科学の論文』に与えた影響について」(『モラロジー研究』No.44、一九九七)は、その研究の手法は比較思惟・自然法研究として極めて妥当なものであると思われるとしている。そして松村健一「自然

法としての『中庸』思想とその宗教的起源(序論)」(『麗沢学際ジャーナル』第6巻第2号、一九九八)において「法学博士広池千九郎はその著『東洋法制史序論』に於て自然の法則としての『法』をその基準として中国の『法』と日本の『法』とを比較し、中・日両民族の思惟方法を明らかにしているが、その手法は比較思惟の方法としてはある意味で至当のものといえるが、古い研究であり、客観性・実証性に欠ける、等の短所もあるものである。小論はこの比較思惟研究としての広池博士の方法より示唆を受け、筆者の専攻する先秦中国思想史における自然法の展開について、その一端を明らかにしようとして試み、まずは「序論」として提出せんとしたものである」と述べているように、特に中国における自然法を思想史的に再検討しようとして試みている。

四 聖人研究による試み

広池千九郎にとって、聖人は「最高道徳は、日本皇室の御祖先天照大神をはじめ奉り、世界各民族の間において聖人と称せられておられるところの御方々の実行せられた道徳でありまして、宇宙根本の神の心に一致する道徳であります。」といわれように、『最高道徳の実行者』であり、したがって研究せざるべからざる存在であった。広池千九郎は、道徳の五大系統を

第一は、ギリシアのソクラテスを祖とする道徳系統

第二は、ユダヤのイエス・キリストを祖とする道徳系統

第三は、インドの釈迦を祖とする道徳系統

第四は、中国の孔子を祖とする道徳系統

第五は、すなわち、日本皇室の御祖先天照大神及び日本歴代の天皇の御聖徳を中心とする道徳系統

の五大系統に分け、さらに各聖人について討究している。本研究所においても、聖人は大きな研究対象の一つとして取り上げられてきた。以下にその諸研究を見てみよう。ここでも

① 広池千九郎の論を中心として

② ヤスパースの論を視点として

③ トインビーの論を視点として

④ 文献目録・解題

⑤ その他

に大別される。

まず、①の立場からの研究として玉井哲は「広池千九郎と神」——世界諸聖人の教説を受容して——（「研究ノート」No.179、一九九五）で、広池千九郎の生涯において、どのように神・聖人を受容していったのか、その過程を概観し、諸聖人と広池千九郎に一貫する心的態度について探求している。玉井氏は広池千九郎の神観については「広池が最終的に辿りついた神の実質、それは慈悲心」であるにとらえており、おそらくは広池千九郎に一貫する心的態度についても「慈悲心」であるにとらえられていたと思われるが、その点については明確に記されていないのが悔やまれる。②の視点からの研究としては、玉井哲の「聖人」に一貫するものの探求——K・ヤスパースの「規準を与えた人びと」に沿って——（「研究ノート」No.138、一九八二）がある。ここでは「あらゆる時代、あらゆる次元から聞こえてくる暗号に耳を傾け、そこから、包摂的な実存的真理の地平を開示しようとした」（P.1）というヤスパースの立場から、ソクラテス・イエス・孔子・仏陀、の四聖人について、「ヤスパース自身は明確には表現しなかったことを、もしくは、あまりにも自明であり、しかもあまりにも深淵で貴重なものであるが

故に表現しなかったのかも知れないことを、敢えて意識の上に取り出し、ヤスパースとともに「聖人」に肉迫し、あわせて「聖人」研究の視座を確立しようとする」（P.74）ことをねらいとして考察を加えている。また、玉井哲「聖人」における実存と超越——K・ヤスパースの「規準を与えた人びと」の基本構造の探求——（「モラロジー研究」No.13、一九八二）においては、同様にヤスパースの立場からの聖人研究であるが、ここでは特に聖人の「超越者の確信」とそこに起因する「無制約的行為」、「安らぎの地平」について考察している。そして「聖人」たちを「どのような限界状況に対しても怯むことなく、何度も挫折の経験を経ながらも、超越者を確信し、あらゆる制約をも突破したところに、自己の自由と安らぎの地平があることを確信させてくれる生き方の典型として」（P.117）読み取っている。③の視点からの研究としては川窪啓資「トインビーにおける神の法則と自由の法則」（「研究ノート」No.150、一九八四）がある。〈主旨〉では「モラロジーでは、神の心は慈悲であり、また自然の法則であるとも説明されているが、簡潔すぎて分りにくい面もあると思われる。そこで、今回は、トインビーが同じ問題を「歴史における法則と自由」という題で詳説しているので、それを紹介しながら、モラロジーの神の原理あるいは慈悲実現の原理の理解に資したい」としている。ここでは純然たる口頭発表の際のレジюмеに過ぎず、詳しくは分りにくいのであるが、川窪啓資「高等宗教の比較的考察」——A・J・トインビーと広池千九郎の求めたもの——（「比較文明研究」第一号、比較文明研究センター、一九九六）では、歴史家としてのトインビーが世界の宗教の発達段階をどのように整理し、どのように分類しているのか、また特にその中の六つの「高等宗教」すなわちヒンドゥー教、ユダヤ教、ゾロアスター教、仏教、キリスト教、イスラム教に対する立場を、1.永遠の相の下に・2.シマクスの立場を取っている・3.多様な宗教と多様な道・4.トインビーにとって歴史と宗教の関係（結び付き）・5.トインビーの東洋の宗教に対する態度、の項目に分けて紹介し、またトインビー個人の精神

史について考察している。そしてさらに広池千九郎の聖人研究と比較対照し、「トインビーと廣池を並べてこのように書いてみると、両者のそれぞれの特色が見えてくる。トインビーはどこまでいっても探求者で、その学問的追究は果てしない：（中略）：廣池は高等宗教の相違を超えた本質をつかみ、自ら聖人たらんと努力し、そして『聖人の伝統今ここに在り』の自覚に達した学聖であると云えよう」としている。

④の研究であるが、美和信夫『天皇および天皇制に関する文献の解題』（「研究ノート」91、一九七六）は、「社会教育講師などモラロジー教育にたずさわっておられる方々が、なお一層天皇（制）問題についての理解を深めていただくのがかりの一つ」として編まれたもので、第一部・第二部に分けて構成されている。第一部は「歴代天皇の本質・特色、即ち、歴代天皇の事蹟・精神、或は歴代天皇に継承されている基本的性格など、天皇自身の本質・特色に関する文献と解説」であり、第二部は「天皇制の本質・特色、即ち、天皇という制度（地位）の本質・特色に関する文献と解説」である。また、巻末に「広池博士の天皇論」を収めている。

さて、昭和六十年に比較文化研究室が発足された。その目的の一つは「釈迦、孔子、ソクラテス、イエス・キリスト等、聖人と呼ばれた人々の実践した道徳の本質を明確にし、さらにそれらを相互に比較して、普遍的道徳原理についての研究を深化させること」にあり、「明治以降の聖人伝に関する邦文文献目録の作成と目録収載図書購入」という作業をおこなっていたようである。その時編された目録が、以下の釈迦・孔子・イエス・キリストに関する四冊の目録である。

竹内啓二編『釈迦伝文献目録』（「研究ノート」No.155、一九八六）

欠端 実編『孔子伝邦文文献目録』（「研究ノート」No.157、一九八七）

竹内啓二編『イエス伝邦文文献目録——明治・大正篇——』（「研究ノート」No.162、一九八八）

竹内啓二編『イエス伝邦文文献目録——昭和篇——』（「研究ノート」No.166、一九八九）

これらはいずれも明治初期から当時までに発行された伝記の書名・著者名・出版名・目次が検索できるように配慮されたものである。ただし、「我が国における聖人研究の歩みを振り返り、今後の聖人研究への展望を開きたい」という目的を果たすには、詳細な文献整理を通過せざるを得ない訳であるが、単なる目録に終わっているのが悔やまれる。その点は我々に残された大きな課題であるといえよう。

その他の研究としては口頭発表の資料をも含めて、以下の通りである。まず、聖人の意義について考察したものに美和信夫の「聖人及び聖人思想の意義」（「研究ノート」No.93、一九七六）があり、「この諸聖人及び諸聖人の教えの意義を述べたモラロジー以外の文献を紹介し、その歴史的、現代的、未来的意義を確信する参考としたい」というものであるが、引用文を集めたのみで単なる資料の羅列に終わっている。また、神道についての研究としては三瀧信吾「神道における『神』」（「研究ノート」No.150、一九八四）において各種の神道についてその「神」の語について考察している。仏教についての研究としては、川窪啓資「インド古代思想史における原始仏教成立の意義および釈尊と広池千九郎博士の本体に対する考え方の比較研究」（『道德科学研究』3、一九六三）がある。「ここにか、げた1部と2部の表題の背後にあつて、私の探求の対象となつたものは何か。1つは『人類は如何にして神を認めるようになったか』で、もう1つは序文にか、げた『モラロジーの世界文化における位置づけと、今後の激動する世界史にある人類に具体的な新文化としての力量をモラロジーが備えているかどうか』というものであった」と述べているような問題意識から表された古代インド思想史と釈迦に対する考察であり、インド思想・仏教成立について概説するとともに広池千九郎の本体観とについての対比をおこなっている。また、鈴木康之「仏教における究極的実在について」（「研究ノート」No.150、一九八四）においては、「1. 仏教における依拠あるいは

信仰対象」・Ⅱ、神の「人格性」と仏教における法の「非人格性」に分けて仏教における究極的実在について考察している。また、釈尊・仏教における菩薩道について考察し、モラロジーとの比較考察を試みたものとしては竹内啓二「菩薩道——釈尊から現代へ」（「研究ノート」No.164、一九八九）がある。また、仏教とキリスト教との比較をしたものとしては竹内啓二「仏教の慈悲とキリスト教の愛」——慈悲実現の原理との関連で——（「研究ノート」No.180、一九九六）があるが、これは「岩本泰波氏の『キリスト教と仏教の対比』（創文社、昭和五十一年）の第五章「愛（アガペー）」と「慈悲」の内容を紹介しながら、仏教の慈悲とキリスト教の愛について検討したものである。キリスト教についての研究もいくつかなされている。まず、キリスト教の「愛」と「死」と「恵み」とを感得せんとする試みとして神谷幹夫「遠きにある神・愛と死と恵みと」——ヨハネ3・1—21——（「研究ノート」No.150、一九八四）があり、キリスト教、特にイエスの死生観と精神的成熟とについてのべたものに宮崎珠徳「精神的成熟と死生観」——イエス・キリストの場合——（「研究ノート」No.164、一九八九）がある。また、イスラーム教についての考察としては山田順の「イスラームにおける神と人間」（「研究ノート」No.150、一九八四）があるが、これは「コーラン」にみる信仰の基礎的概念を通して、イスラームにおける神の認め方および神に対する人間のあり方について「考察したものである。また、ソクラテスについての研究としては諏訪内敬司「ソクラテスにおける神の観念」（「研究ノート」No.180、一九九六）があるが、これはソクラテスの神観について考察し、最高道徳のそれとの関係をさぐったものである。また、孔子についての研究としては欠端実「精神的成熟と死生観」——孔子の宗教的情熱——（「研究ノート」No.164、一九八九）がある。これは孔子の宗教的情熱と精神的成熟の関連・人格の深化を描き出さんとしたもの。「孔子もまた宗教的情熱をもって生きた人であって、そのことによって、史上、もつとも深みのある人格の所有者の一人となった」ということを示さんとした試みである。

結語

神とは、科学的に十全には証明しにくいものであり、したがって直接の研究対象とはし難いものである。以上、先人の諸研究を概観してきたが、いずれも広池博士の神観であるか、又は、既成の民族・宗教の神観を研究することにより、何らかの手掛かりを得ようとする試みにとどまっている。結局は、神が哲学や理論上・概念上のみで捉えることができると考える方が無理なのではないかとも筆者には思われる。

むしろ、現在に至るまでの歴史に鑑み、人類の軌跡を学び、世界・人類に多少なりとも幸福をもたらすための普遍的価値を追究すること、そのことにこそ我々の使命はあるのではなからうか。以上、感慨を述べ、結びとしたい。

先行研究目録（年代順）

一九六三年

インド古代思想史における原始仏教成立の意義および釈尊と広池千九郎 川窪啓資

道德科学研究 3

一九七一年

資料集「モラロジーと宗教」

研究部編

道德科学研究 43

一九七六年

天皇および天皇帝に関する文献の解題
 聖人及び聖人思想の意義
 モラロジーにおける神観念

美和信夫

研究ノート

美和信夫

研究ノート

93

93

91

神の原理について	土屋武夫	研究ノート	93
神の原理	瀬戸 衛	研究ノート	93
南豊儒学の天・神に関する思想が広池博士に継承されていると思われる 点の私考	瀬戸 衛	研究ノート	93
モラロジーにおける「本体」の人格的把握について	井出 元	研究ノート	93
カントの神の証明をめぐる	下程勇吉	研究ノート	93

一九七七年	阿南成一	モラロジー研究	6
モラロジーと現代自然法論			

一九七八年	黒川 洋	研究ノート	109
最高道德五大原理間の理論的構造関連——伝統の原理と人心開発救済の 原理の関連・位置を中心にして——			

一九八一年	井出 元	モラロジー研究	10
広池千九郎における東洋思想史研究			

一九八二年	永安幸正	モラロジー研究	13
宇宙自然の法則と道德実行の構造——最高道德の社会科学的 研究序説			
「聖人」に一貫するものの探求——K・ヤスパースの「規準を与えた人び と」に沿って——	玉井 哲	研究ノート	138

一九八四年

モラロジーにおける神把握をめぐる——神と宇宙・自然——	山本健寿	研究ノート	147
広池千九郎における信仰の確立	欠端 実	研究ノート	150
広池博士の「慈悲寛大自己反省」体験——天理教入信から大正4年の困 厄に至る時期における「心使い」と「神」を中心にして——	立木教夫	研究ノート	150
広池千九郎の神観の変遷	玉井 哲	研究ノート	150
儒教における神観念としての天と広池千九郎の道德思想	井出 元	研究ノート	150
神道に於ける「神」	三浦信吾	研究ノート	150
遠きにある神——愛と死と恵みと——	神谷幹夫	研究ノート	150
イスラームにおける神と人間	山田 順	研究ノート	150
トインビーにおける神の法則と自然の法則	川窪啓資	研究ノート	150
現代アメリカにおける神と宗教	ウエルター・タナス	研究ノート	150

一九八五年	井出 元	モラロジー研究	18
儒教と広池千九郎の道德思想			
シヤカ研究	村上雅啓	研究ノート	152

一九八七年	井出 元	モラロジー研究	22
「神の原理」の形成——広池千九郎における信仰と道德——			
孔子伝邦文文献目録	欠端 実	研究ノート	156

一九八八年	竹内啓二	研究ノート	162
イエス伝邦文文献目録（明治・大正篇）			

一九八八年

イエス伝邦文文献目録(昭和篇)

竹内啓一 研究ノート 166

一九九〇年

日本の伝統的文化と広池千九郎の道德思想——「広池千九郎研究」に関する補説—— 井出 元 モラロジー研究 31

神の原理の構成と今日的意味——なぜ神を問題にするのか——広池博士の説をめぐって—— 永安幸正 研究ノート 167

一九九一年

自然的な生き方
モラロジーの神について 欠端 実 モラロジー研究 33
望月幸義 モラロジー研究 34

一九九四年

広池千九郎の生命観 欠端 実 研究ノート 177
新宗教とモラロジーにおける生命主義的救済観 竹内啓二 研究ノート 177

一九九五年

「生命の連絡」と「自然力」の研究 松浦勝次郎 モラロジー研究 41
広池千九郎の宗教観——「道德科学の論文」を中心に—— 竹内啓二 研究ノート 178
広池千九郎と神——世界諸聖人の教説を受容して—— 玉井 哲 研究ノート 179

一九九六年

文化の多様性と「神の原理」 欠端 実 研究ノート 188
神の原理の展開 井出 元 研究ノート 188

広池千九郎博士がとらえた「自然の法則」——「自然」と「道德」はいかにかわっているか—— 立木教夫 比較文明研究 1
高等宗教の比較的考察——A・J・トインビーと広池千九郎の求めたもの—— 川窪啓資 比較文明研究 1

一九九七年

『東洋法制史序論』の位置づけとその「道德科学の論文」に与えた影響について 松村健一 モラロジー研究 44

一九九八年

自然法としての「中庸」思想とその宗教的起源 松村健一 麗沢学際ジャーナル 6—2

追記

本稿の筆者松村健一氏は麗沢大学卒業後、東北大学大学院を修了し(中国哲学専攻)、後にモラロジー研究所研究部へ奉職しました。

氏は精緻で高度な文献考証の見識と古典漢文への深く広い造詣を有する希有の人材でしたが、平成十一年八月、不慮の事故で夭折致しました。優秀な学徒を失ったことへの愛惜の念と氏の遺志を後進のために遺したいという心に依り、遺稿「モラロジーにおける神観研究史」を公刊することに致しました。

(井出 元記)